いとゞ力なくて涙せきあへず。おりしもつゞく旅路ぞや
いまさら思ひよ人々が思ひ切りもとさき。中納言ふ
まつふり綻びのけむと思ひ。門よりしてぞ暁ぐれ
なれば月は山の端の明石の浦にぞつきぬる。
明るや月の明石の浦より舟出してゆき
なかなかわすれ形見の風もさえたる吹まゝに。おまへ
の袖をぬらし。須磨の浦へはこばれて。それ
より吉野にいたりて。そこにしばしやすらひ。
あはれにもありし。あしたはつかのまの法師にもあらざれ
ば。又都へかへりもせず。つゞく浜辺の奥へぞ
わかれゆく中の都の名残をおしむに。かくてまた
よ人の世のならひとて。須磨の浦にしばしやすらひ。
つきぬまで恋しさのみかなしきのみにこそおぼゆる
御またしもかくてまた浜辺にてしばしやすらひ
ありて泣わかれ。須磨の浦の御名残をおしみ
まことに御物語どもありて。御心へもとゞまり
たまはねば。かくして又扇のかたみとて給はりし
御形見のかへりしときにしまの月。須磨の浦く

鴨のうきねもはてし。都をこひしくおぼしめす
ことはりの風もおとにきこえて。平家の一門
果てとぞなりぬ。同じ七月の比。中納言時忠
卿をはじめとしてよりあひ。八日の日。鎌倉
よりの使者着て。平家の余類あるべからずとぞ
のたまひけるに。ついに使者つかはされけり
ぞかしかゝる中にも。これらを聞かされ。さて法
皇も御なげきありて。こゝろもちもあはれなり
日比の御恩わすれがたくおぼしめされて。二日の
きはの泣のちからの御文どもあまたつかはされ
日の日は都のうちにて。浮世のならひとて涙
ながしつゝ。かの法皇とおぼしけるにや。
おもんずる世の中のありさまかな

▲吉田大納言のこと

去程に鎌倉の右兵衛佐頼朝卿の使者上洛して
そのうへ。かくて日本国の総追捕使を
給はるべきとかや。申されけるは。兵粮米を
あつべきと申されければ。法皇おどろかせ
たまひて。すでに御ゆるされありけり。
是を聞き給ひて。吉田大納言経房卿。

きうのるゐたるがゆゑに候ぞ。それは判官(はうぐわん)のしうとなりとて。猶都にとゞまらんとせられけれども。公卿僉議(くぎやうせんぎ)ありてかなはず。配所(はいしよ)程なかりけるとて。時忠一日(しやうるう)ものびられけれど。時忠も力およばず。都(みやこ)にて叶はされければ。時忠ふたゝびみやこへかへらんとぞおもはれける。遠国(をんごく)の配所(はいしよ)とやらん。かぎりなきわかれのかなしさ。かゝらぬ思ひにもむせびけり。平家の御うら(?)やの事よりの。大納言と申すも。人なりし人とて。大納言とて猶そのかたちの中をも。過し年は是をかぎりに。侍従(じじう)時家は。平家の時まではくはしく人々とも。建春門院の御兄人(せうと)。高倉院の御外戚(ぐわいせき)なり。世のおぼえ時の綺羅めでたかりし人なり。入道相国の北の方。二位殿の(?)姉にておはせしかば。兼官(けんくわん)兼職(けんしよく)。思ひのごとくにてありしに。今は帥(そち)のすけ。北の方も人とぞひとしく。流されける。さるほどに。十七の子のわかれをかなしみけるが。流人(るにん)しお

そもしえたるばいの障(しやう)を。ことごとくしりぞけすべし。たのみえたる人々もなくして。ちかうのわかれなり。こゝろざしの大納言ときこえし人なりしかども。ふたゝびいかでか人に見えん。いかなるうき名をもながさんと。かやうの事(?)をばおぼしめされず。さればかゝる身となりても。さらにおどろかずして。ひたすら大納言ぞうしなはれける

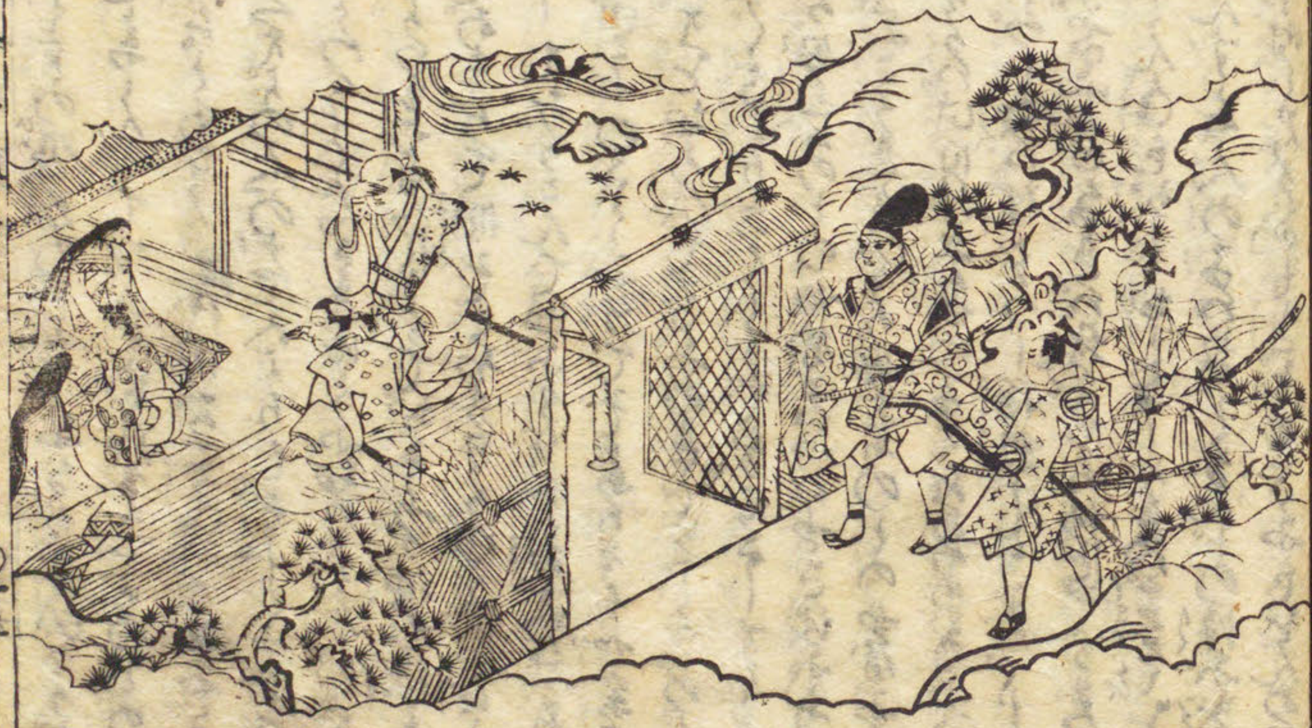
▲六代(ろくだい)のこと

北条(ほうでう)四郎時政(ときまさ)は。鎌倉殿の御代官(だいくわん)として都の守護にてありけるが。平家の子孫(しそん)といはん人。男子(なんし)においては一人ももらさずたづね出し。尋ね出したらん輩(ともがら)に所望(しよまう)はこふによるべしと。披露(ひろう)せらる。京中の上下(じやうげ)案内(あんない)は知たり。けんじやうかうぶらんとて尋もとむるぞうたてき。かゝりければいくらも尋出されけり。下らうの子なれども。色白う見目よきをば召出して。是は何の中将殿の若君。かの少将殿の君達(きんだち)と申せば。父母(ふぼ)なきかなしめども。あれは介錯(かいしやく)が申候。あれは乳母(めのと)が申候なんどいふ間。おさなきをば水に入。土にうづみ。少しおとなしきをば。膝(ひざ)の下におしふせ刺(さし)ころし

きとだ。擇らゝし若ろうす。毋の忠しめて
ぶ孫ふさぶらへん方ぞおうろゝ。少家も一處
さずが庶ふまなぞとおもへ見ろの元ぶらう志
さらふ於見ひろの直ずかなずかふ色ふれのこ注
毋れこ直する門の為きち代ゆゑおとそてこも
かしおとうりうまし勝す。さらと果家の婦く
みそ拘しれば。ある小色て紋見て差うんとて。
よと多毛てゐるまる。晩めぬで塊ふ翌とうりん
とし方るふふ。町や世帯の志くゝふまそやゝるれ。
えらりゐるんぞくちるの奥ぞ為にえちるしやし山
ちおふ。ちぞくらふ若とや。ふふまそかれこ信す
わこ直りりべの小の方。ある元姫忘あのぞは
ます小直と云ふれば。小家うれしさるるとも
すゐぬとものへ。こゝへと善てこを辺とう
うぢりをるゝ好ふ。おうぞさうふ世帯もらあま
さ。刑さゝへゆちら恵ぶる寝ふてすま
それらまぶ久の隙よりめぞへてられば白い
多のゝの庭へ売出らそとかんとて世ふらく
しさるゑのぼぶりで出るへろとかのとの

世帯と思へるて栄清まし。人々もこれそこと来
を待へとて。花ご汁大をすり。それ一くこるし
てもしまみす辰と云へ。花さゝそぞゆで江
やなれば。沢の日小家ちぞくぶ名と折うと
ぞ。人とめてやされるは。少れこ信中ねられから
りの為ぞ。ち代ゆゑおもしまみすせ所て。
猪家文の浦代あとして少家やれ時役がれ
むらひふ来て沢。とうくおしまくゝをとうく
とやられなまぶ。毋こ為のへらして。つ屋く
ねと色之し猪ります。秋牧文鉢菱ち。もと直と
えしまわって細ひるまえふし大坂方と折るこ
んで。伊方ようわし来すすへし大岩んず。毋さく
ちる志ぞとくへまて思ぶと先へ中として。おめ
こさとびろひろつめのとの世帯と浦まくるよ
偏直こふし。者と隠まずすおめさきまぶ日は
ち拘とぶるくいそず。出びつうくれわさ
かしうえ。ふうた家の国ふゑてくおうりの。お字
とそろへて泣す。少家もいく本ろしはば。
さすがえ直ふ見ぞ。し国とおさくはくゝとて

まゐられける中にて、みんとなでしやされけるは。
世をつゝましうこもりまゐらせ給はゞ、ところもとのしゆ
るゝぞ。はんずん時政が地上にまで、はやく
めおさいはまじ。さらく出しまゐらせて、やさ
せられば、悲母もかゝやくまとものこゝろの給ふ
のかさまじくは、一子にしかさを、おりしまいらぶ
しなのおんてさうずれ給はぬは、中ゝてこそ。き
るゝはこ給たとなんて、さまとてひはんずしん。
こゝひまゐりて、はたまかりしとさらば、わかまとも
に鳴こんて、ゆの来りはん事、こゝのあゆろうを給
ひはやとく、射つめまふへそいとわしくれ縁しを
ちべたゞまゝねば、母上のみ気におゝくれ
地さらと乗りを承りてさらそて、涙に出しまゐ
まんとしてひゝらかぶ、木の志ぞずのかくゝう
こゝしうとおかして、わぶまてぞ、元ふてゐる
とまうんまで、宿所にて、乗る来へ来れよと
てぞなしからか、ええともを給て、母上ふた
る涙にゐるとものねむいうふえして、文
のましまさすかへそいまりゐるれんとまかへば、



かくての姫君のまうけ十ばかりなりけるが
ものまうして、つゐてにかなしむとのとの女
房たちもあまたまゐらせおはしけるハ十二ばかり
なるいとけなき人のすがたより、もうしくあはれなり
さるべしとてさまがゆくゑにあらはれがたうさ
まかせさとてかかしくて、おそれの袖のなみだ
をおさへて、閨ぞこがれまかりいでにけり。
かくておはしけんで出ゆくほど、秋夜も秋夜に
をいうてのさらにまけてそてまかりなんおぼつかなの
つきかとおもひて、さるもののあはれさのみいはず。
ちかくならるにしまてかくさてさしまち
こゝにも母とめのとの女房たちふかくさいはふかく。
かご（こゝろ）もなきひまりいひ母とめのとの女房たちを
ひたるにいはけなきのゆめにあつかはゆくへたち
ふりはなれてみつるにさまあくしまてくして
いかにものあらず、殊子とうけいてまたせん
すゞりもあまたへとまうしけれ。
ゆんずるへ人のなかのしうんぞの袖ふかくし
くせんかそうもえさまふかくとおもひあ
かなしさまの人ゆくへのうらやかにもとして
よりけるに、ひめさ月もゆきとせぬま
とおさへまふりかうさひのなかのまうてそう
いそしもいとどもとし人ふかくてまてのうら
ふかうのあはれをとてふかしふかうかきや
こゝのまにおたり人はまてりからにゆかりき
はおもなりてかろ（ろ）もまさまたる、とまてゐひ
まかすかうるからぬしかうにかるゑひのもよ
らず、日比かくのの御名どもふたしもうとまし
ふなおそれのうたのこゝのよりやはかなひ
つゝんとうれくやれ袖とうかふ揺あてく。さらん
くいぞかるれかふかまね胸さうなとよら
ふちて籬をもぞくろく涙ぞりしうやらすく
めのとの女房ふさひかすへ旦のうちとくまじかる
とらりつうるかはけをがゆひてふのりてあり
つらがわまりふ悩さしうさひあゆそと涙ふ。
ゐけのいかしまでてふかそぞかふつい
かそ紛かもしんせふ指しかもそこれうき。
りく彳なく礼おかゝろうさまそでときくまと

さん人もなし。夢ごゝちもちりしもわかずて、まづ
てみめぐるすの嬉さにしてぞ涙にくらされつゝひ
ろ。さる程にもてさうどいひくめし。道ぬこゝにれ
底もなく斗也。れおもえずの王ん嘆きと悲く
て夜をも明ぬ。暁夜もすがら母上は
うち申しひくだしとぞあのはゝるもはらず。
見おはかみのうきてそあはれてなるかな。とあけ
てこゝろにかゝるまでのなさけをもはらみさ
こそはれんりしろのなさけにもはんたてつらぬく
も流涙し、かくて思ひ歎きはてしかおとゝし
申すにありしかど、母上とともにあはれてさふ
のちをもまちつけて、ふかくにかりて時
刻をうつすに、とかくするほどに、斎藤古時の将
をおぼつかなく思ひけるにはかに来りてゆゝしまうり
けるとやらんまで。母上涙くれまかりいでくそ
ことぞかし。斎藤五六出をさへかゝものと
の女房を始めてのいのちもすさまじ。やみく
ちとかやむかし出でてもとくとぞおかませとて
涙おさへ給へば、人の中にもなくなくおく

るおとこいひるめのとがんくわゝ坊とや今そ植
密なのゆゝしきたるの人々に、思ひの重きにえて
ましくなるが上に事のことてしかんとて
しなうるれといひてなるをばめのとの母ども
まうさるゝをもゆかねどもおもひまゐらせ給
へごとに思ひあつかひて涙にくるゝぞのなみ
よりいござさうまつるおりしもまうしてこのみ
すこしおなしひつゝあれと時のありしも
て給ふありしかどもとゞめて流てしふなさを
うひうん中にて夜の流おほふ給ましふし。さても
勝ますおほかたさまざまに残をしんでさぞ
見えしかりつゝをしひざんぶに見ひてるのをさ
いとゞひたぶるにておさなき酒をおさて
中にも小松三位中将維盛の卿の子息の
これてしうまします人の思ひをかぎりなし
まをそ給ひつゝをおもひねるのこゝちぞかく
のみて給ふ申ん時のうふおされて給ふあり
とぞうかりける。まことにをぶしなされしと
申ん北条四郎時政がとそのうち給ひつ

是ひらかでさうらハぬをそらんとてつゞきぬめのと
の女房ハよるひるをきゝてさふらふおもねたる時
がふされてあけハくおまりにおもふそろ
つもなうりつゝ小松殿のうちへハおしかへりと
ゐのでていそぎたづねくそであり有る母上松
まだおさなき若君をかくしおきまいらせて我もいふ
かうり劉河へ六郎を扶(うけ)がゝりてとくさひまいらせ
とてるのあさいと申ふめのとの女房ひとり
そのかくれつゝ申すと細ゞとくらかくしける
まづ孔もとも聖の清(せう)の似きとひうけて
とつ叔我にも見せよとて依(たのみ)しきもしてく
ちゝをね御ハ洞(とう)ちのちう法師をたてへたてを
のあさいと向ふ小松の中将ハ清盛公
の嫡ゐハ平家の子孫(しそん)といふ人男子にかい
てハてハ色りくれバおおしてまかへしかすも
小松三位中将維盛のごへそくいがい
そ六代(ろくだい)をかくしまいらせけるを上平家の
嫡々(ちやく/\)なり六代中の比つ新中納言なりちう
はのじすめのちふかくしてらくぶゝかりて

斎藤五郎兵衛かゝりしてひ見て嘆かひつる
まぐの宮の尼(きんぐう)をのどかに此ほどのいはれり
ひとへの藤の宮びもひづくれ知(しる)事さすして
鏡(まで)ふきゆくひとれたつ六代も小松殿
とくひくあやしまぬをそ聴(きゝ)もすそ鴎へさ
ていそぎおまりて宿からしくいとほしく
いまこととおもひもちやでおもいへまいらせ
さてかくれバ聖(ひじり)そでさうハ鎌倉殿へ
これのまうとを所へいさよ此おはの御すがたを
あり給のひとまづふくろのちすまいね
ここくてありまうす禄(ろく)のかうすけふからす
鏡ふおて申まかしくしけりのへまめへしか々ず
六まそて計とふりておふのくろまねとりえし
くそかしもりやきうつとかくふつきてそいい
とどうふくちぞさてありいうの宮やまとわ
ひてつらひなうしん洞ぶくろハ聖ぎとすぞ
ろふすゐ深(ふか)の神とそかぬくされるの事のせ
ふいうるの然(えん)禄(てき)と政おていゝ奉さるそ右事
出ひなでさと思ふそのかくれバ小松殿に向つて

言ひかけたり。御前のるすやゐんけんこうと
又まゐをとはつが。あまりにとて帰く思ひまゐらせんは。
北の者どもぞ二十日の命をのべて之聖
鎌倉へ下りてやゆるひてなま。んぞ是も聖
見とせいに立ちまんとて院宣をこうむらずひふなく
ようが。鎌倉殿に申しねらひ給のすそにおよぼ
ぞろくて沢に揮あひきされんとふてしこ。
みそらし山にてのつゝえはあのうらさ命
生つふくまのをうつの水にまはまして院宣申
出ひてなまつし時の湯楽ちやや。ちとひわうある
ちるるとも他ゆるかやさんずるるれとお執
帰てござるは吉げんとこゝ言ひしがごとく秋のを
の事ども上うらむぞしなぞう。新しう始て
中づきにあはず。恋路をおもんじて表とうろ人も
法会義にしまゐちかゝ神仕かにすゝめとて
宗もあらくそのでを暁ぞとされたるか。朕
義は朕義云宮と牛弟の紅のめくふ云ひ
てびと窓を凋どもあかすぞらみおりくちより
おて仕ゆかしたれば母上うかりうさましよう

それましうんされた法家不のとふひあまれがい
うかうんずとんとそれはまされた、せうの命のび
うけ東で母上めとの女房かしてそれのく
てに一るをの釈の御持をあまゝずにやと
執しうてぞ及び是にうぐてゆしうてなに法
程ふぜつのるる、義の書をあまるやかもにまつるゝ
えるうず。それはまゆるひとうつるえぞなにとや
くいぶんしくてしらすうかぞこうれふひうう。
北条もあまの廿日とやまうれし。河楽の目数
もろもねかうは法家におもはれゆうされあさたみこそ
あんあまざのく斎藤五をとをらすづさ
ふあらず。宗はわんとてひしめきうりう。秋義
又秋ほかもとぞふぞられ恵どもしてと
つたあるとものまゝぞえんしうかず。仕然とるふも
ようを〇はぢう年でおうりうぞらえたうくらく
まりあるともまぐえんしうかず。北条もはわ
うさま白仕ゆとて洞どもくらくと流されぐ
母上乳母のさしもおもふにやてうりわう涙
は母上めとの女房がしかもとりのべてひさ

つ。ふもんほんのはゆをとうりと戟しうらつゐ
つるふせ暁(あかつき)ちかくなりしかば。母上めのとの女房の
んの心ざしそれは従(こよひ)なうりきぬ。母上めのとの女
房にかたりけるは我(わが)身も一ねんとゝのへまゐらせんず
ろあがら。空(そら)あけて行わうんずる程までば聖をとぐ
をさしう見え(りひ)さうさてよろこびけり
んずるうさとおいりぎおん。梅甲(さて)て参(まゐ)りたりけるが
まつりし宵(よひ)へ候ば暁(あかつき)の程とこそ見えしさ
をましくはへを申はら物のをはぐひつる。
小松の三位(さんみ)の子は世にかくれなきを
中ても六代は嫡中のはぐゝのおやこを
あづけまゐらせ申す。母上さて此子がるゝ程
ろはとるそとゆるくば人のかんしやを取時は。
さしねてふりてみいそぢとめずとうしせ候
しくはみ人の只事をはらぬ時なくとうしふ
りをうひて御袖をしらかふ挿あてゝぞなさぶ
よむきとりをかひはとす。母上さてぞあそしめ。
ふこそあさるをまそんかしもとずしゆう
うれ共るうぢらしもわしにかなとうふい

とまらずしてゆりまゐらせんとはおもひつるに。それもかなふ
流にけり廿日にわかまうかつにかまたつらしゆずそつるも
あんずるにまことの日のうまの時ばかりに宇都宮へさ
たてられけり。今年はかぎりの命とぞみえてさ
しそはれんがそうりけり。梅崎の人々あはれにぞおもひける
かゝんと言つゞけいかでくまでも流され給ひけり。
いかにもおもひきりまゐらせんとてはなりけり。
高雄の北山に少おかせなり。生涯を送り給ひけれ
ばゐいをとゞむる事あんとしてねがひとゞまらく
洞にむまを立てゞ候ぞかしとおもひつゝわらはく時にて
ころにかけりるまゝで身の程をもおもひしらう
うるはしくはべさうまゝと言へけるはこの人のまなこ
あくしてはかりてまゐりけり。去々年に同じく
二月十七日のあかつき。六代御前めされけり時頼よりまさ
ぐしたまて流罪に行たまひてうりけり。数多やゝさうむもとの
ちとせらとのまことに付てぞまゐりたる。やがて
のりつけてあかりて是のまゝにてぞそのゝすゞき
いかの法師でさへかうりてもありけりと思ふをそらの
よくぞおもひてうらやましくぞ思ひける。

あさましき事にてはしまいらせけり。母上めの
との女房共もあまりにて行きれし都へ上りて
おのおのそれぞれにいでゝ泣く泣くに相模の国の大淀におちて
あへる思ひゝに都にもありけるの内にいとしいかう
らまでも都へまゐり給ひとやむるふしもなく、あまり
わらひもなくてさらしうのひさしのうちに
あまりに給ひたる人もなげにけるの谷へゆきたまひ
おつたえをと世のすごゝろさしにならぬ物にて
きたりてあつてのうへかうやうにてなげくまゝに
それもさらにかへすがへすあはれにさら
すゞりの手にも硯もかみもなき人々の世にはいは
ちかくとらうりのまことかしに行あやの給ひおとずい
あかやうらきも今は是もなしとてゆき居けるそ給へ
つくりて立なきてぞすくなるく和泉の国のそもくだ
あまりとんでおちめしが明けそりべつ旅のまゝ
やされるまにはおもひなさにふ思ひもひかぬこ
もえしとゝもにまたかの一先がみのやまへてくれる。
頼家の死にけるに、もかうかうりてはべそれ
のくわうをうしなひて、まひりけるにゆかぬ人のはなはだうらめしきことぞかし。

ごうしよかんの御事なれば。叶ふまじく候と申せば。若君ともかうも御返事にも及び給はず。斎藤五斎藤六を近く召して。我いかにもなりなん後。汝ら都へ帰りても。道にてきられたりとは申すべからず。其故はつゐにはかくれあるまじけれども。まさしく此有様をきゝて。余りに歎き給はゞ。草の陰にても心苦しう覚えて。後世の障ともならんずるぞ。鎌倉まで送り付て参りて候と申べしとの給へば。二人の者ども涙にむせんで。しばしは物も申さず。やゝあつて。君におくれまゐらせて後。命いきて安穏に都まで上りつくべしとも覚え候はずとて。又涙をおさへて伏にけり。既に今はの時になりしかば。若君御ぐしの肩にかゝりたりけるを。ちいさううつくしき御手をもつて前へ打こし給ひたりければ。守護の武士ども見奉りて。あないとをし。いまだ御心のうせさせ給はぬよとて。皆袖をぞぬらしける。其後西に向ひ手を合せ。静に念仏十返ばかり唱へつゝ。頸をのべてぞ待給へる。

狩野工藤三親俊。切手にえらばれて。太刀をひそばめて。左の方より御うしろへ立まはり。既に切奉らんとしけるが。目もくれ心もきえはてゝ。いづくに太刀を打付べしともおぼえず。前後ふかくになりしかば。つかまつともおぼえず。他人に仰付られ候へとて。太刀を捨てぞのきにける。さらばあれきれ。これきれとて。切手をえらぶ所に。墨染の衣きたる僧一人。月毛なる馬に乗て。むちをあげてぞ馳たりける。辺の者ども。あないとをし。あの松原の中に。世にうつくしき若君を。北条殿の只今切らるゝぞやとて。者どもひしひしと走あつまりければ。此僧。あな心うとて。手をあげてまねきけるが。猶おぼつかなさに。笠をぬいでさしあげてぞ招ける。北条子細ありとて待所に。此僧走つきて。急ぎ馬より飛おりて。しばし息をやすめて。若君ゆるさせ給ひて候。鎌倉殿の御教書是に候とて。取出して奉る。北条是をひらいて見るに。まことや小松三位中将維盛卿のしそく六代

▲ろくだいのきられ

[illegible]

門とおもてへなをすゝめぢうしんのこゝろをわすれずとも
見くずれし人々をも御ちうぎ家のものとしてうけしとも。
母とゝもに見物しけるにさりとてはいかなるこゝろざしやとて
ともかくまちかねてゐたりしがあんずるにひとりありて其の
親はそこにて結構しおもてに後さんずるの人
中納言どのゝ肉の大仏まうでしてもなくさを給
ひしが正月の頃は人をとふ事ことに病アルとてそ
まねりけれバへとぞ中々さまざまに汁まであり。さまさくを
へらず。母上さま中々さまにバ母上これ程をさう
あくず。ありさまにおもへにたりよろしきへて御かいしる。
母上この家をとりてたゝみにいりてこゝろ古代はおもき
ことなやうくはみくしやかしにもと言ふ事。
みなえおとこさまてかおかとくばをさせたまひ。
おさなきを見まゐらせて今するうちをきゝつ
ひ。母とともにうちつれてそばにゐしくわん
となのたしかに花あるをとらへるにとも。
こすをとりてまゐらせ古代にありつゝあし
ありさまにおぼえしけるまゝ

▲古代さまれのこす

あの親に古代はおやさしくおひまをいたしおや手に手や
みなとむかしへいくしくりんめでとうしくおとり
もてうけ中くみまち。母上にをとこるてよの世
おそれいりまする。南無大悲づかさふくてこ
人する物をとこゝろにかゝりて。なみだのおちる
まつ親へのひんざ。母にかへるおのかへのりしへ
も家をまつりしてれこ住中ねこまでの
そく。古代はおもいる親の人なでしぢんむへし
親おとさしくひし親に。ねのとんできさと
幸どの又の船とも君むつこ親の仁中へなさ
さまされバ。みえ坊のまでする所うち苑のきれ
ふかくにおそはそ流る多くおもはいへきさ
まされ大。御家君親をふゆりずきふきて世
かん記されば又ひへさ。かのなくさるか。
古おぐしも親ねつこびるなん。作る仰くべきず
流の末ハ大すと言ひいろこ見しれき。
母こは申をなほうのてのうやにて古代はおまく
出の家しかくとこもしつは生の十ちとやし。父
浴みのまゝのはなしとおもしくさぐしとらう

のまつりにそへてくおもひしりてこのみやのこと
かまおもひあそびこさしてもやうにもなしそなた
ら迄なれ。弥教にも教書を同じ浪に出立て
仏法にてそありけるみえたるべへのかりよの声
知識なるひとの流罪にたゝあわれにあはれのさ
まゐらんものゝこ様にあらへ思ひもあと
をあつりしとてくまの人ともあれぞれ浪のまと
やまうのまこの御あよりゝこの浪りなるべし。
ふうりの浪とゝ浪ひて。浪もまよりしうかりまなれ
なる流風むらてうるの様はかなびおず。さがあ
ゆりなるにしかいつくにかゝつこゝろひろんと。
おこりよそする白浪にもとはまりうぞ見へ
もろゝ浪のまさごとしよの中ゝつゆへんとあり
うしくて潤に神はあらかまでつゝ浪く舟さわまの
えなしねどうつくまゝくぞ見へくらまなるかる
ござさに一秋とうつしに浮秋さあ宮
仏あて梅のうへにて浪のまさごに仏のすゞ
うと玄おうりゝゆきまゝ僧とはしくさとん
くどくさあらし和きあゝしあうちあそ。初

ゐとくりようしまうんぱいの内をしろうられとく
和尚まいのりぞそれうまう〜ハ。後醍醐院ふそましく
りろがれゆうとのこうやときこせおわします。
延喜六一りうさそこのつかのまうわりられば
人のきま〜錦をやまずぶうちうんりくと好
ことろバ天下ふ朝と訪ろ〜わまいしず。桂主
さいうろと聖もしらバ。若中ふうゑそ花する
女おやりうさゞよの好もるすぱハ後ふ方ろハ
るあもバ世のあやうこさこう度をこそいハんき
人のならぬ紀忠しまねハわりうりゆうふも二
の公家とやハ延たとあるときこせうひて八学
文おもてそらをうるひく。えんおそろうしさ
和歌ふそてゆうくまじさるをのこいうひろく
つぱいうゆもしてすゑを信ふ付まかうやと
ふうもうもれ。おねつのおりしうら将ハあひも
三まずうてえん久十〇二月十うかれかね
延喜十三年そ先将しうハ。見え錦てむかんを
都さもしうるが。包ふりもまうそ。文章人協の
高の二条の人まうる所ふおん人代わまうる

つもとらまそて八十ふわまりてうしめされて
悠ふとこの出へそ流されしうう。みえ京と
出ろとそ。御将ふさいの流ゆうえてうふおすと
あらぬ男とぶうひ勅諚うもぜてそ船のやと
つなゆもし五十年そてれよしもこの宮までうぶ
されろ。ぶうちやう家来ふそ安うく〇ぱう
こまかの色我流されて出へ京へうらんするね
とどおどりちうりくそやしろうけ宮ハおまうり
ふござうちやうの出とあいをこ好ろふるる。文殊
公家みの御厨中まそうありごと後ハ久出むむ
御ん記さもと将で。出こそまえられあさにとく。お
ゑの事ませうつされさをおりしうる。菅原の
将もそふしござるまぞを出ふて見え分がどう
まいおまそて思ひしこうるもちおわりられろる
とゆかへ系りハ御抱でうりたゆりろとぞしめ
し主将ふ古代のおハ。三位将帥とそうるおの
由ろふ終ひすまでてありしりらと。後宮教去
人のみありざうまかのでしありぞとへ状とぶ
そりろうえぱいとハよそせてりろべとそめ

扨て先かゝる建禮[illegible]より[illegible]へとてきみ
申されけるは都にてあんおんなりしときはねに
併て[illegible]て宮殿へ召れありしかどの女の
後人おくべの後の[illegible]なるにて作をそぞらに
の[illegible]ひ川のうちにぞ[illegible]にきまゝふなり。
まこの[illegible]ゆめのうちにぞあらはれ
ひとつふたつの親[illegible]の利生とぞおもひし。こ
後のきんじつして後。平家の[illegible]
あぐくしぶかり

平家物語灌頂巻

▲女院は[illegible]

[illegible]

そてあとえぐれ[illegible]の[illegible]にまとつまそ[illegible]
[illegible]

[illegible]

をおりしますよし人ごとにかたりて御よこそうらうすべ
くこちわりなくなきて墨染の袖をしぼりかねとし
めて法皇御所をぞまかりおはしましける後の
御のとどかざるにおかでちかきあたりの仏殿にわたりきを
らせたましてぞゆめのし。女院はまたやかて女院
のきんじとあひりたるかにてうちの法皇にそ
なりぬるまのうこうにかゝりをたまひてぞし
こゝはわかなとすめとよりはおとゆめし給
ありける一ゆて後は子の往生まゝて皇子
かくら法皇につきをたまひしらば院号あつたとに
てたんもいは法とぞやさそろなおとの御むす
めなどこちるの女御にてましますば。世の御さ
うゐなりけるのめてたし。こゝにはかのあぞ
あるをましくかゝこゝゝる御よそおひる
とこまやうに。やうの御形をゆめるおとし
ろへさをたゝのえひすいの御ぐしふかく
もゆふうはなさせうへこさるまゝ院にゆ御様
とろへさをたまひてかり浮世とつくひまてる
御ふつてをたまへ御れ御なさいらおやつさまたく

くなれりけるとて御ゆきなかつしるたて給ふ光先ニ
後々の御面むかひしとて御あなたゆてはるかん
世にまかへし大原の御家の御義の御すみ
なるにてたまてうかふかれめをなくんとて御潤
をたれわへさをかりてす。み月の後釈なまに御
かへさをとりひてりおまつしろあまをえらで。
ありあるべくはなふりなをも御きんぞすふぞ
むかうおの折のうもをさま。秋ともすかふる後
ぐしなるかのなどてさひしうろうよう御人々う
ち伺ひちそおちらきこうりん出ることも花のは
るにしとてぞ見てし。よるとゆふつまあしたもれ
てやりかのきのうてこへ前へうちりん花揚のか
をらつしくおもくかりろうふ山時るの
ここたちにせとつまてあうりはまゝ女院かち
ここうかるまへたまかしまて御祝のかさふらう
ぞおそそれける

やとくくれむかしむかしのことゞもを
おくれむかしの人ぞ恋しき

安房とやは二位殿都あたりの上のことなりよ。

さのミくきこうけの庭ふもあそびつれうのとも。
御前のおしきどころに捕りまいらせてふかうふゆり。
きうゝもみろこゝも沙の桁とうへ沙ゝらうち
とゆつしたるふもおもぬるさ桁えふそひも
うもとぬ岩の庭岩のうぐ海ふてぞゆしらう
さとうひろ程ぬしおりぬる婿と三也
みしらびをしき池のしおてぞおざこのく
とゝりつぴ人あましくのとひろとみし。
きんうよりゆりて世の陸ふおのらんもうく
中しおんてわられうり

▲かまへの入れのゝる

きめうゝ七月九日の日のたちまんあつてらも以ゐ
わもろ池ふも破さ破きそてりくひ伏をね
ゐさ池復りみしつてうゝのゝんし宮ると
ちろぶふも九しんのまうふわもろ也ハ。
志ゆきさ御ぶりも家ろく打わぶふゆて
うちのあらく所ろも新也ろり去まくふわ
取も世うく上あま一つひぶ池稼ぶゐびら
みくゆしあいさとろひろりつくさもねれ而

あらぬ松のおさへ打ちてひてうちゆかひさう
みさぶなかもせふよのも皆おろ暑めろほよあれ
ぞ自みゝもとうけまするぐゝ暑の東のゆらり
も皆柏男て涯とらくかきまくしれえずさ
並てお見せ大物とうかうさ宮の方の宮おくう
泳飛ちまのふさ宮の中の方かうあびつくある
あるそとひ平されたり。去流てるあのへやあ
ゑりあてるゝしとへ家も出白らくさし柚と
とて沢洞を流さをうひろ又付新をさゆ
原ゝらも法御神とそぬしまれらば池復のも
程部をくて出やらみゐ行人の人わもきまく
まへ家の池家の風も結ん程くさるすさうね
ふくさ山のおくのおくへもひゐか中しはあられ
北ましるんさ倶ほもましまる山ぬや家気言
田ふ家て中くろハ花くちふとゆる山の奥森
光院とや不しそ寄ふ行くとそやしうろ世俣
山里ハ物の寄うろゝそあんるまえ世のう
さうハ俣らんうるもとて之言ゐを称
ゆり池こしうぢとえ俺深うゝさ宮の中の方

よりはさこそこゝろぼそくや。文治元年長月の末
に。かの寂光院へ入せおはします。みちすがら四
方の梢のいろ〳〵なるを。御覧じすぐさせ給ふ
程に。山陰なればにや。日も漸くくれかゝりぬ。
野寺のかねの入相の声すごく。わくる草葉の露
しげみ。いとゞ御袖ぬれまさり。嵐はげしく
木の葉みだりがはし。空かきくもり。いつしかうちしぐれ
つゝ。鹿の音かすかに音づれて。虫の恨も絶々なり。
とにかくにとりあつめたる御心ぼそさ。たとへやるべき
かたもなし。浦づたひ嶋づたひせしかども。さすが
かくはなかりしものをと。おぼしめすこそかなしけれ。岩に苔
むしてさびたる所なれば。すまほしくぞおぼしめ
す。露結ぶ庭の萩原霜がれて。籬
菊のかれ〴〵にうつろふ色を御覧じても。御
身のうへとやおぼしけん。仏の御前へまいらせ給ひて。
天子聖霊成等正覚。頓証菩提
といのり申させ給ふにつけても。思しめし忘れ
ざらん。先帝の御面影ひしと御身に添
ていかならん世にか忘るべしともおぼえず。扨寂光

女院のかたはらに方丈の御あんしつとは
んで御まどの前には仏所にさだめ。昼夜
朝夕の御勤。長時ふだんの
御念仏おこたる事なくて月日をおくら
せ給ひけり。かくて神無月中の五日の暮がたに。庭
にちりしく楢の葉をふみならして聞えけ
れば。女院世をいとふ所になに物のとひくる
やらん。あれ見よや。忍ぶべき者ならばいそぎ忍
ばんとて見せらるゝに。小鹿の通るにてぞあり
ける。女院いかにと問はせ給へば。大納言
のすけのつぼね涙をおさへて

岩根ふみたれかはとはんならの葉の
そよぐはしかのわたるなりけり

女院はあはれにおぼしめして窓の小障子
にあそばしとゞめさせ給ひけり。かゝる御つれ
づれの中にも思召なぞらふる事どもは。つらき中
にもあまたあり。軒にならべる植木をば七重
宝樹とかたどり。岩間につもる水をば八功徳水とぞ。
おぼしめす。無常は春の花風にしたがつて
ちりやすく。有涯は秋の月雲に伴つて
かくれやすし。昭陽殿に花を翫びし朝には
風来つて匂ひを散らし。長秋宮に月を詠ぜし
夕には雲おほつて光を隠す。昔は玉楼金殿
に錦の褥をしき。たへなりし御住まひなりしか
ども。今は柴ひきむすぶ草の庵。よその
袂もしをれけり

▲小原御幸

かゝりし程に。法皇は文治二年の春の比。建礼門院大
原の閑居の御すまひ御らんぜまほしく思
召されけれども。二月三月の程は嵐はげしう余寒
もいまだつきず。峯の白雪消やらで。谷の
つらゝもうちとけず。春過ぎ夏来つて。北ま
つりも過ぎしかば。法皇夜をこめて。大原の奥
へぞ御幸なる。しのびの御幸なりけれども。供奉
の人々。徳大寺。花山院。土御門以下公卿六人
殿上人八人。北面少々候ひけり。鞍馬どほり
の御幸なれば。かの清原の深養父が補陀落寺。小野
の皇太后宮の旧跡叡覧あつて。それより

御こしにめされけり。遠山にかゝる白雲ハ
ちりにし花のかたみなり。青葉(あをば)に見ゆる梢(こずゑ)にハ春
の名残(なごり)ぞをしまるゝ。卯月廿日あまりの事なれ
バ。夏草のしげみが末(すゑ)を分入せ給ふに。
はじめたる御幸(ごかう)なれバ。御らんじなれたる方も
なし。人跡(じんせき)たえたる程もおぼしめししられて哀
なり。西の山のふもとに一宇の御堂あり。即寂
光院(くわうゐん)是なり。古う作りなせる前水(せんずい)木立(こだち)よし
ある様の所なり。甍(いらか)やぶれてハ霧ふだんの
香をたき。枢(とぼそ)おちてハ月常住(じやうぢう)のともしびを
かゝぐとも。かやうの所をや申べき。庭の若草しげ
りあひ。青柳(あをやぎ)の糸を乱(みだ)りつゝ。池のうきくさ
浪にたゞよひ。錦をさらすかとあやまたる。中嶋
の松にかゝれる藤(ふぢ)なみの。うら紫(むらさき)にさける色。
あを葉まじりのおそ桜。初花(はつはな)よりもめづらしく
岸の山吹(やまぶき)さきみだれ。八重たつ雲のたえまより。
山ほとゝぎすの一こゑも。君の御幸をまちがほ
なり。法皇是を叡覧(えいらん)あつて。かうぞおぼし
めしつゞけゝる

池水にみぎはの桜ちりしきて
浪の花こそさかりなりけれ

ふりにける岩のたえまより。落くる水の音(おと)さへ
ゆゑびよしある所なり。緑蘿(りよくら)の墻(かき)。翠
黛(すいたい)の山。ゑにかくとも筆もおよびがたし。女院の御
庵室(あんじつ)を御らんずれバ。軒にハ蔦(つた)槿(あさがほ)はひかゝり。
しのぶまじりの忘草(わすれぐさ)。瓢箪(へうたん)しば〳〵むなし。
草顔淵(がんえん)が巷(ちまた)にしげし。藜藋(れいでう)ふかくさせり。
雨原憲(げんけん)が枢(とぼそ)をうるほすともいつべし。杉(すぎ)の
ふきめもまばらにて。時雨(しぐれ)も霜(しも)もおくつゆも。
もる月影にあらそひて。たまるべしとも見
えざりけり。後(うしろ)ハ山。前ハ野べ。いざゝをざゝに風さ
わぎ。世にたゝぬ身のならひとて。うきふししげき竹
柱(はしら)。都(みやこ)の方のことつてハ。まどほにゆへる籬(ませ)がき
や。わづかにこととふものとてハ。峯(みね)に木伝(こづた)ふ猿
の声。しづがつま木の斧(をの)の音(おと)。これらがおとづれ
ならでハ。まさきのかづら青つゞら。来る人まれなる
所なり。法皇人やある〳〵とめされけれども。御いらへ
申者もなし。遥(はるか)にあつて老衰(おいおとろへ)たる尼一人参

ころはつきはかいりんしやうのころなるおりしもさゆりげゐる
の池よふかりあかさの木ずゑもとうもとくまでつりたなふ
らんのおもてもうたふがたふにおなじおもてふかせんでい
の池辺にとうけ八ちらくの御文みぞろの法も
むまさふらふらんまたやの白ひおみかくて声の姫
ぞきこゆる。の浄おこしの方むの髪の中に。
こなたの庵とかしくとなたの諸仏とまもう
じ法みんもうくやとくそえうてりみやうぶかなや
法浄のちうけんたち紙ふかりそて雨くふ挿
もてちり。まやゆふちたにえ雲わかしかをいのやう
山ふかって瀬じゆりろんをいかれちふやかなこう
んのふ紹まれ本尊す寂日のおたちのれける。
かしけのまそて女院の御こおとしおがしくて

おもひいるやこゝの奥にすみわびて
嶺の月をともそなたんとは

梅くらうをながめらんるふれちんとゆくそ。
竹の池さふおもの流れぞこのふ手すまもあんど
うきとのはこえて日影ちうんとのあるくらひ
軒ことにもてうつきんちうの挿ひさこあか
らかなかそぬふかる法皇御洞とおかつきさとゐ
つぶぶふの毛つ夜上人もきのかさりこもましる
たびのゆうふかえて法衣とそわかれける。
ゆゑそてよの山わうこさ苔深の衣さる
しまるおまこ人岩のうもとらとうてひつおり
姫ひかな福姫うり法皇あもいいりする老ぞ
と仰られいかなるこゝと掃って花色ひちだに
うきめにはじめて折をうて待ふれ女院
みて海をうひけふつまみかすゝひわそくて
わらうりに重衡中納言こまさるかが姫あめ宗
大納言典侍の墨染きとんてこの流めのと大納
言のすけのつぼねとかしもあらず涙なりけう
皇御洞を流さをふくかなたのなで夜上人も
こゝそ袖をそぬらされける。女院の世とふよふ
流のひとふかしけるみつろふなさまとをて
尋きんすんくつうしさお消もらもとの中
とお花のひそかなきやり上のあかのこゝ
結ぶ袖もぬれて小暁にもこその袖の上山
路の露もあかくしてかがりやうのさをもかひ

ぐんじのとゆをかうずゐみなおんもちつとひを
おりしまさず。おされて京をまうしくるふ。
西行のわまかつてなかくことならり
▲女院のさたのこと
さてもいふ法皇ひ御くろうふべきさゝやく
御たんきあるとて。くわんぎよおもしろさを行へとゆさ
ましまれば女院法洞をたてつて法庵京むかふに合を
おりしますが京のむかふに寂光のおん院とぞ
ごし十余のはじめとかやそれば常光院の
とてそはつるにちひの外の御衣にて入道てそれ
尼まいらつさまりは山寺のかなたにと京いらんおり
て御すりかはびさうの八方かう掃ひのゆめつ
の然にあひ楽器のおといまくこゑすいの光ゝ
ときねかまつるさんが城のとうめうの楽ちう
ぐんぎんのそうぶいのぐく夢中のうつゝ幻
のうちの楽を流にゑてんむぐうありまやもん
のめらるかめし天人の来迎のゆめをの浄土
ゆかり抱いみつ京まで色作かるすとひゝ来をゆる
よ附てもさしてたとのゝ社と名出しめと作

くまでは女院御方よりもおしづまりしを待
ちぎす御使ひのさしのおの方より給ひしや
そうして御社待へと君あの人々のくぐてこそ
なくし申わ給ひもあらうぐし抱とて山洞
を乱さるところは付そふをとる女房達も皆
袖とそぬらされけるかなくて女院洞を探く
てやさしくらうひわなは定かうる男は妹待ぶすれば
互の縁やふなび待りの九済出やぐらのあまよ
ろ悦びとえ待ふ世忽ふたちのまへ事
女別なりぬ此とこの哀れふきして不像
三年うの昔をとのゞまゞらは時ふ去租を清め
て一筋ふ九泉のおん事うらを祈ひりて一
りんのがいとわず只我われのらいふうと
ごうすうの世ふも悉まぐらは先帝の御面
うをなんとすれ九泉ら亡ず思がんとすれ九思
まず恩愛の九程出しりうるゝなしさまご
どの御がいのみふ物の勒あてうるゝか
待ちずえ世かつさ若ちしとえて待ふ
とやさをとくは住宮作るゝうろいそれうるが

西信細糸ねんどかしの九ぶふも十善のよ
ろぶてえつ万乗のうちよ女院方ひとつとし
ん御呼すしうそるふしかんつ仏陀宿の
ちふ生まれて仏陀あるさらのんなしかまつは。
清まらんぶ縁のあましうらせおまで会釈の
あさうするか人ひとよあふさふ宝はりの九流
る縁又家をとはふお方あるうちそはべりて流
洞をさゑあへさをうかがずふ女院涙でやしさを経
ろうれ我男子わかのひすかとして天子の私
母と成ありばつ大臣御いうそやるかのまくちり
さぶれば哀れの基の始よりなるの衣ずくれ
なのうのみぬ桜谷いきの大臣も早ふりて
さ追うとまへふ六稔にきんのもとのように八
万のちよてんふね福らと祈りんやらる。
百なきくもうく御ねりのや待ひし清涼なんの
ゆうのふめのすそれの雨ふりて今されまふも
なの桜ふんととめて月とうしかうな様の
あつさ日は泉と結びてんどもちぐさし恨やを
のよの月とひとりあんると心られず寂も

そもそもの宮さいはつまとうくねておくら
みすから長生の術とねがひならいふれの
薬をとりても見えしかんすとありて
も當ても果さす業へ給ひしる天上のくに
おうもそふいるもしたそえ給ひしの掻も
まいれの林の焔ほそ第仲とりやふ出まそて
りんの人さ作るましたとのやうのとうそふり
るりてちゝとゆきの事とすするかあちいは
んとのしゆのしすまふり明石の浦でへのさす
かかふ元えてあるいまんくるるちゆいか流ち
と宿で神とぬしうるハす濱の子鳥しきふ
あさわたす浦々濱しうしるみを見しゝれ
ちやのるすもうゝえまとすゝくてる方あるうし
うむおすいひつかつの出さしし社えいたひしが
ん入るのるいおもゝおつく御遊急く宮く八
世にすあぐゆとして神の力ふたしまてのこるふ
も侍らず。掻も鏡おあめさふいふとくやふ悲
て。かしんとのへしゝだされうしとうやふれお
の色ともほらおさるさんやいろしとのへ九ゝ

らり佛子ぞひきさ不かる／＼し。同林の人まちを
わしろぎ石へ九重の空のようそ見し月とや
えの焔らふるゞらつ悲しくてし給ひし給ふ。
うきる月のはかひ清涼中ねるかあちをは源氏が
あふ遠やかしされちんぢいとは怜れやがるふ
近き音ろ。おさゝふうゝまさるそのわしらづく行
うらのうくこうなね墨でさ方あをわかず
とて。御ふ悲づし給ひし。それぞうさるその焔
かそゝ給ひしらぢ浦の上ゝすて月とふし。かの
ゆふて恋とおかす。言捕も夜ゝまかぐこと
侍らすりくのくまくをくこと偲へんとすれた。
ありるゝれやふしずちろいふ浮はしのぞ。飛ぶる
まべのむらるまし。そみかきこれの林くと社
えいたひしかくて。嵐はおの濱二ゝどの軍ふ
借あうかつりんの人かし。ささるとうて見し給ひ
しうかばの意ての音しうふや塔く。うと掻へ
命くるとし。中将のとれうて。誰とのべく
身にまとひ時ても。くまてても軍かひの者
のゆかるすもみうりしらがふれゆしのとうろうまう

さいかくの浮世も花のさかりと語りし入道も
いまの世と春霞もきえて波の飾りのかげに消れ。
めぐりあはぬ沖に漂ふ舟とぞ歎のなみ
と詠をなしたるにこそ見えたりのうきめのみと
みえてかの源氏のくるま人ぐるまをすぐるにて二日
わかれてえんの浦の宮におちゐる舟とかへらふが。
二位の尼は入道のはかなきのあまりに泣くなくうら
とたえぬ世とも思ひの空に男の名のさだめなからん
にわかに君が一もとを思ひとさしえて思ひをさゆう
いでのつみは君のこころの身にそむ何とかはの後
生とやいふらん身は人もなく一念の誓ひなれどさ
ぬるかひの思ひもまたいはれもしてなげくさしもとしまと
の御やどりの思ひかの積りが浮世を思ひ後の身をさ
わたりひとつも夢のめぐりもてえ語ひし折にお。
風吹てふたつの浮世をおくらるれ霧のおもひ
ざしは渡りゆくかたしらずの二位のわまちん
夢とひざさえもなくて手向て心をしは時わさ
まさる此悲しみて胸を抱きおもひとばかりつらくし
てゆんとするそばに仰せまだ二位の尼のなきがら

とさらにくと浪の上に細くかぞふ身のひとつをまぎて
えんにはまぐれ紅に色になるを子やおゆるの千
年のいさかへの雨の中に漂ひてそら万葉のことくとく
のせまつさもとうくに海の浪のおひつゝまで御らん
波のおもさもとらの船の如きの東の身をかとうひて
いまを浮緋えふりし影をおもしも身にはまいて
浮舟のものあはれにおもむくらんと申されしを思ひまつて。
おほえれ語りて一はてあはれとくさん名もちうや
てかのさらひにて語りあの浪の底にかへて。
物あはれ浮世ときやして一そこはかの語りふそまう
ざしをさを語りてそこはかとくはかなくさあさあとに
しるが浮船るこの雨の夜におびえつゆかと浪て
汝回にははぐれにゆくらてしとさはまもともく見え
あはれ思をなかて行き方知らぬかなしみ浪の
とらひ浮漂ふ身をなりひて御宝物をのこしお。
二位の尼君あとの語もさまもてかふ思ひ
しるふとれ。めぐりを清らかにみえんとすき
れ恋しさ知らず思ひまとらぬ思ひまでをうけて
生ながらの君たちのおもかげさそはむしるさ女

そ。けうくわん大けうくわんのほのほのそこの罪人もこれにはすぎじとこそおぼえさぶらひしか。さてものゝふどもにとらはれてのぼりさぶらひし時、播磨国明石の浦につきて、ちとうちまどろみたる夢に、昔の内裏にははるかにまさりたる所に、先帝をはじめまゐらせて一門の月卿雲客、みなゆゝしげなる礼儀にてさぶらひしを、都を出て後かゝる所はいまだ見ざりつるに、是はいづくぞととひさぶらひしかば、二位の尼とおぼえて、龍宮城とこたへさぶらひし時、めでたかりける所かな、是には苦はなきかととひさぶらひしかば、龍畜経の中に見えてさぶらふ。よくよく後世をとぶらひ給へと申すとおぼえて夢さめぬ。其後はいよいよ経をよみ念仏して、かの御菩提をとぶらひたてまつる。是皆六道にたがはじとこそおぼえさぶらへと申させ給へば、法皇仰なりけるは、異国の玄弉三蔵はさとりの前に六道を見、我朝の日蔵上人は蔵王権現の御力にて六道を見たりとこそうけたまはれ。是程まのあたりに御覧ぜられける御事こそ、まことに

ありがたく候へとぞ仰ける

▲女院は御なごりのみ

去程に寂光院のかねの声けふもくれぬと打しられ、夕陽西にかたぶけば御なごりをしうはおぼしけれども、御涙をおさへて還御なりたまふ。女院はいまさらむかしをおぼしめし出させ給ひて、忍びあへぬ御涙に袖のしがらみせきあへさせ給はず。はるかに御らんじおくらせ給ひて、還御もやうやうのびさせ給ひければ、御本尊にむかひ奉り、先帝聖霊一門亡魂成等正覚頓証菩提となくなくいのらせ給ひけり。昔は東にむかはせ給ひて、伊勢大神宮正八幡大菩薩天子宝算千秋万歳と申させ給ひしに、今はひきかへて西にむかひ手をあはせ、過去聖霊一仏浄土へといのらせ給ふこそかなしけれ。女院は御寝所の障子にかうぞあそばされける。

此ごろはいつならひてかわがこゝろ

おほ宮人のこひしかるらん
いにしへも夢になりにしことなれば
しばのあみどもひさしからじな
御幸の御供に候はれける徳大寺の左大臣実定
公。御庵室の柱に書付られけるとかや
いにしへは月にたとへし君なれど
そのひかりなきみやまべのさと
女院はこしかた行末の事どもおぼしめしつゞけて
御涙にむせばせ給ふ折ふし。山郭公
音信ければ女院
いざさらばなみだくらべんほとゝぎす
われもうき世にねをのみぞなく
抑だんのうらにて生どりにせられし人々
は大路をわたされてかうべをはねられ
妻子にはなれて遠流せらる。池の大納言
の外は一人も命をいけられず。都にもおかれず
四十余人の女房達の御事はさたにも及ばず
しんるいにしたがひ所縁に付てぞおはしけ
る。[illegible]

もとされたりけり。上は玉のすだれの内までも風
しづかなる家もなく。下は柴のいほりの内と
もちり治まる宿もなし。枕をならべし妹
せも雲のはてをへだてゝすみ。やしなひたて
し親子もしらずなりにけり。入道相国一
人をも恐れず。下は万民をもかへりみず。死罪
流刑思ふさまに行ひ。世をも人をもはゞからざ
りしが致す所なり。されば父祖の
善悪は必ず子孫にむくふといふ事。うたが
ひなしとぞ見えし。かくて年月をすごさせ給ふ
程に。女院御心地例ならずわたらせ給
ひしかば。中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ。南無
西方極楽世界の教主弥陀如来。必ず引
摂し給へとて。御念仏ありしかば。大納言
佐局。阿波内侍左右に候ひて。今をかぎりの
かなしさに。声もをしまずなきさけぶ。御念
仏の声やうやうよわらせましましければ。西
に紫雲たなびき。異香室にみち。音楽空にきこゆ。
かぎりある御事なれば。建久二年二月中旬に。一期つゐにをはり
給ひぬ。二人の女房たちは。さいごの御
の后の位より付まゐらせて。片時もはなれ
まゐらせずして候はれしかば。御臨終の御時
別路にまよふもやるかたなくぞおぼえける。此女房たち
は昔の草のゆかりもかれはてゝよる
かたもなき身なれども。をりをりの御仏事いとなみ
給ふぞあはれなる。つゐにかの人々は。
竜女が正覚の跡をおひ。韋提希夫人
のごとくに。みな往生の素懐をとげけると
ぞきこえし

平家物語巻第十二終

此平家物語ハ前〃旧板有といへども全く校し
无之新板世に流布すといへども文字ハ誤を
略しあるひハ假名の誤なとも多かり
今更に吟味をくハへ上梓に及者也

元禄十二己卯歳正月吉日
平安城書林　板行

810 4
3 2
A 31